

抱いている誇り

コリント人への手紙第一 15章 29-34節

はじめに

私が月の第二週に説教をする時は、「コリント人への手紙第一」からお話しています。コリント人への手紙第一の15章は、「死者の復活」がテーマになっています。

使徒パウロはコリント教会に、イエス様は私たちの罪のために十字架で死なれ、三日目によみがえられたと宣べ伝えました。そして、それを聞いたコリント教会は、そのことを信じ受け入れたのです。

しかしコリント教会の中には、「死者の復活はない」という人たちがいたようです。この人たちは、イエス様は確かに死からよみがえられたけれども、イエス様を信じるクリスチャンは死からよみがえることはないと考えたのです。

私たちはどうでしょうか。私たちの多くは、イエス様が死からよみがえり復活されたことを信じていると思いますが、イエス様を信じる私たちクリスチャンも、やがてイエス様がこの地上に再び来られる時に、死からよみがえり復活すると信じているのでしょうか。

私たちは「使徒信条」の中で、「罪の赦し、身体によみがえり、とこしえの命を信ず」と告白していますが、それは、イエス様がこの地上に再び来られる時に、私たちの「身体」も死からよみがえり復活することを意味しています。

今日の聖書箇所でパウロは、もし「死者の復活」がなければどうになってしまうのかということをお話しています。一つは、死者のためのバプテスマに意味がなくなる。二つ目は、パウロが福音のために絶えず命の危険に晒されていることに意味がなくなる。三つ目は、罪を犯さない正しい生活に意味がなくなる、というものです。

1. 死者のためのバプテスマ

まず一つ目の「死者の復活」がなければ、死者のためのバプテスマに意味がなくなるということについてですが、パウロは29節でこう言っています。「**そうでなかったら、死者のためにバプテスマを受ける人たちは、何をしようとしているのですか。死者が決してよみがえらないのなら、その人たちは、なぜ死者のためにバプテスマを受けるのですか。**」

この部分の解釈は非常に難しいと言われています。そもそも「死者のためにバプテスマを受ける」とは、どういう意味でしょうか。古くから言われている解釈は、洗礼を受けることなく死んでいった人の救いのために、生きている人が代わりに洗礼を受けるという「代理洗礼」というものです。コリント教会には、そのような「代理洗礼」が行われていたというのです。しかし、そのような「代理洗礼」は、キリスト教の正統な教えにはありません。洗礼

は、基本的に信仰を持つ本人に授けられるものですし、幼児洗礼も、親の信仰によって、幼児本人に授けられるものです。もしコリント教会が、このような「代理洗礼」を行っていたとしたら、パウロがその誤りを厳しく批判しないはずはありません。

私自身は、この「死者のためにバプテスマを受ける」ということは、「代理洗礼」のことではなく、「病床洗礼」のことではないかと思っています。ある人が治る見込みのない病に侵され、死を目前に病床でイエス様の福音を聞き、信仰を告白して洗礼を受ける、それが「死者のためのバプテスマ」ではないかと思います。死を目前にした人が洗礼を受ける時、本人の死後の不安は取り除かれ、平安に満たされます。家族や近親者は、本人の救いを確信し、天国での再会、最後の審判の時の身体のみがえりの希望を抱きます。「病床洗礼」は、そのような死後の希望を私たちに与えてくれます。

しかしもし「死者の復活」がないならば、つまり人の命はこの世がすべて、死んだらすべてが終わりだとするならば、死を目前にした人が洗礼を受けることにどれだけの意味があるのでしょうか。本人や家族や近親者の救いの確信と慰めと希望のために受けた洗礼が、すべて無意味になってしまいます。単なる気休めになってしまいます。

しかしそうではありません。私たちの命は、決してこの世がすべて、死んだら終わりではありません。確かに死後には天国があり、最後の審判の時には、私たちの身体のみがえりがあり、私たちの救いの完成があるのです。その「救いのしるし」として、私たちは洗礼を受けるのです。確かに洗礼が私たちを救うものではありません。私たちの信仰が私たちを救うのです。しかしその信仰が確かなものであるということの「しるし」として、私たちは洗礼を受けるのです。そしてその「洗礼」という「しるし」を通して、私たちは確かな希望と慰めを確信することができるのです。私たちは、「死者の復活」が確かにあると信じるからこそ、そこに希望と慰めがあるからこそ、「洗礼」を受けるのです。

2. 命の危険

二つ目にパウロは、「死者の復活」がなければ、パウロが福音のために絶えず命の危険に晒されていることに意味がなくなると言います。30-32 節でパウロはこう言っています。**「なぜ私たちも、絶えず危険にさらされているのでしょうか。兄弟たち。私たちの主キリスト・イエスにあって私が抱いている、あなたがたについての誇りにかけて言いますが、私は日々死んでいるのです。もし私が人間の考えからエペソで獣と戦ったのなら、何の得があったでしょう」。**

パウロは福音のために命を懸けていました。パウロはイエス様の福音を宣べ伝えるために、世界中を旅し、各地で迫害されました。パウロが経験した命の危険について、Ⅱコリント 11：23-27 に具体的に書かれています。「**労苦したことはずっと多く、牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました。ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟に**

よる難にあい、勞し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました」。パウロはこのような危険な目に遭いながら、イエス様の福音を宣べ伝えていたのです。この他にも、今日の聖書箇所「エペソで獣で戦った」とあります。これが比喩なのか、実際に獣と戦ったのは分かりませんが、古代では娯楽として、闘技場で人間を獣と戦わせるということがあったようです。死刑囚などを獣と戦わせて、人々がそれを見て楽しんだようです。パウロも迫害の一つとして、獣と戦わせられたことがあったのかもしれません。

なぜパウロはここまでして、イエス様の福音を宣べ伝えたのでしょうか。それは、イエス様は確かに死者の中からよみがえられ、イエス様を信じる者のやがて死者の中からよみがえると確信していたからです。パウロによれば、もし死者がよみがえらないとしたら、イエス様もよみがえらなかったのです。イエス様の復活は、イエス様を信じる私たちの復活のためです。もし「死者の復活」がなければ、イエス様の復活もありません。そしてそれを命を懸けて宣べ伝えるパウロの人生は、全く無意味で空しい人生と言わざるを得ません。

パウロは、イエス様の復活こそ確かであり、自分もやがて復活すると信じていたからこそ、命を懸けられたのです。もしパウロに死後の慰めや希望がなければ、パウロは命を危険にさらすことなどできなかつたでしょう。人生は生きている間がすべて、死んだらすべてが終わりだとしたら、パウロは自分の命を危険にさらすことなどできなかつたでしょう。パウロは、死後に確かな慰めと希望があったからこそ、自分の命を懸けることができたのです。死後には天国があり、最後の審判の時には身体よみがえりがあり、救いの完成を確信していたからこそ、命の危険も顧みずにイエス様の福音を宣べ伝えることができたのです。

パウロはピリピ 3：10-11 で、このように言っています。「**私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、何とかして死者の中からの復活に達したいのです**」。パウロは、イエス様の弟子として、イエス様と同じ生涯を歩みたいと願ったのです。イエス様が十字架と復活を味わったように、自分も自分の十字架を負って苦難に耐え忍んでいくなれば、やがてイエス様と同じように死者の中から復活すると確信していたのです。イエス様の弟子とは、イエス様の足跡に従う人です。イエス様と共に十字架を負って苦難を味わい、イエス様と共に死者の中から復活する希望を持つです。

3. 目を覚まして

三つ目にパウロは、「死者の復活」がなければ、罪を犯さない正しい生活に意味がなくなると言います。32-34 節でパウロはこう言っています。「**もし死者がよみがえらないのなら、『食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから』ということになります。惑わされてはいけません。『悪い交際は良い習慣を損なう』のです。目を覚まして正しい生活を送り、罪を犯さないようにしなさい。神について無知な人たちがいます。私はあなたがたを恥じ入らせるために言っているのです**」。

もし「死者の復活」がなく、人生は生きている間がすべてで、死んだらすべてが終わりだ

としたら、せめて生きている間に好きなことをして楽しんで生きようということになります。罪を犯そうが何をしようがかまわない、ただ楽しければいい、とにかく後悔なく生きようということになります。現代でも、信仰のない多くの人はそのような生き方を選ぶのではないのでしょうか。コリント教会にも、そのような生き方をしていたクリスチャンたちがいたようです。つまり「死者の復活」を信じないで、この世がすべて、死んだらすべてが終わりと考えて、快樂にふけるクリスチャンたちがいたようです。パウロは、そのような人たちを「神について無知な人たち」と呼んでいます。

しかし聖書全体は、私たちのこの世の生き方はすべて神様に裁かれ、報いを受けると言います。パウロもⅡコリント5：10でこのように言っています。「**私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければなりません**」。私たちは、イエス様がこの地上に再び来られる最後の審判の時に、身体によみがえりを経験して、裁きを受けるのです。イエス様を信じる私たちは、救いを宣告され、この世で行なった良い行いの報いを与えられるのです。そしてイエス様を信じない人たちは、滅びを宣告され、この世で行なった悪い行いを裁かれるのです。

私たちの人生は、この世がすべて、死んだらすべてが終わりではありません。私たちのこの世での生き方は、死後に繋がっているのです。ですから私たちは、目を覚まして正しい生活を送り、罪を犯さないようにしなければなりません。そして、この世がすべて、死んだらすべてが終わりと考えて、快樂にふける人たちに決して惑わされてはならないのです。そのような人たちとの交際に生きるのではなく、健全な教えと信仰を持つ人たちとの交わりの中で生きていくべきなのです。

おわりに

さて今日は、もし「死者の復活」がなければどうなってしまうのかということ学びました。もし「死者の復活」がなく、この世がすべて、死んだらすべてが終わりだとするなら、「病床洗礼」も、福音のために命を懸けることも、罪を犯さない正しい生活を送ることも、すべて意味がなくなってしまう。

しかし聖書は、イエス様は確かに死からよみがえり、イエス様を信じる私たちも、イエス様がこの地上に再び来られる最後の審判の時に、死からよみがえると教えています。イエス様を信じる私たちクリスチャンにとっては、決してこの世がすべて、死んだらすべてが終わりではなく、死後に確かな慰めと希望があります。死後には天国があり、最後の審判の時には身体によみがえりと救いの完成があります。そして良い行いに対する報いが確かにあります。だからこそ私たちは、その「しるし」として洗礼を受けるのです。私たちの弱い信仰を支えるために、目に見える「しるし」として洗礼を受けて、死後の確かな希望と慰めを抱いて、生涯の最後まで、それぞれの十字架を負って、あらゆる苦難に耐え忍んで生きるのです。そしてやがて確かな報いがあることを信じて、正しい生活を送り、罪から離れて生きるのです。そして教会の兄弟姉妹と共に、イエス様の福音を精一杯、宣べ伝えていくのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちが生きているこの社会では、この世がすべて、死んだらすべてが終わり、だから生きている間は悔いなく楽しんで生きようという快樂にふける人生観が支配的です。しかし死はすべての終わりではないと聖書は私たちに教えています。イエス様が死からよみがえられたように、私たちもやがてよみがえり、キリストの裁きの座に立たされると教えています。私たちの確かな希望と慰めは、私たちの死後にあり、イエス様が再び来られる最後の審判の時にこそあります。

私たちは、確かな人生観によってこの世の人生を、洗礼の「しるし」によって支えられ、自分の十字架を負ってあらゆる苦難に耐え忍び、罪を離れて正しい生活をするように導いてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。